

黒田如水と太宰府

黒田如水は安土桃山時代の戦国武将です。天文15年(1546年)、播磨国姫路に生まれました。幼名は万吉、成長してからは官兵衛・勘解由などと名乗ります。如水という名は、44歳で家督を息子長政に譲り、隠居・剃髪してから用いられます。

如水はその優れた知謀と軍略により名をはせました。とりわけ、天正8年(1579年)に豊臣秀吉に取り上げられると、参謀として中国地方・九州などを転戦し、数多くの軍功をあげます。慶長5年(1600年)の関ヶ原の合戦の際には、息子長政とともに戦果をあげ、徳川家康から筑前国が所領として与えられました。

如水と長政は筑前に入国すると、平野が広がる博多の西方に新しく福岡城を築造します。福岡という地名は備前国にある黒田家の父祖伝来の地に由来し、この時に名付けられたものです。福岡城が建造される間、如水は閑雅な太宰府に移り、天満宮のそばで隠棲生活を始めます。慶長6年(1601年)、如水が56歳のときです。

如水が太宰府を隠棲の地を選んだ理由の一つに連歌がありました。中世以来、連歌は天神信仰と結びつき、

太宰府人物志

資料室だより 66

多くの連歌師が太宰府天満宮へ参詣に訪れます。如水は50歳を過ぎたころから連歌への関心を深めます。連歌師の信仰を集めた太宰府天満宮は、如水にとっても魅力的な場所であったわけです。当時の天満宮は長年の戦乱によって荒廃していましたが、如水は中門や回廊を造営し、社領を増加するなどして、その復興に尽力します。

太宰府での如水の暮らし振りを、後世の記録は次のように伝えます。「常に社司・神人にまねき、歌を詠じ、連歌をもてあそびたまいけるとなん」(加藤一純「太宰府天満宮連歌屋記事」)。天満宮から神官らを招いては、和歌・連歌三昧の日々をおくっていたというわけです。生涯を戦乱に明け暮れた如水にとって、太宰府で過ごす晩年の日々は心おきなく風流と文雅に興ずることができた時間であったといえるでしょう。

慶長8年(1603年)、福岡城が完成すると如水は太宰府を離れ、翌年3月、京都伏見で客死します。享年59歳でした。天満宮は如水の手厚い保護に感謝し、その命日に追懐の連歌会を催したといえます。